

2023年度
U12ブロックDC

スポーツマンシップ講習
リスペクト・フェアプレー精神

2023/7 JBAユース育成部会

1. スポーツマンシップ
2. スポーツマンシップがなぜ大切か？
3. リスペクト(大切に思うこと)を子ども達に伝えよう
4. フェアプレー精神を子ども達に伝えよう
5. ライフスキル
6. 全力を尽くす大切さを子ども達に伝えよう
7. 過程を評価することも育成世代では大切
8. バasketボールを通じて、何を子ども達には学んで欲しいか？

JBAにおける育成方針

- 「子どもたちの人間力向上に寄与できるバスケットボール育成」
- 「全ての選手がレベルやニーズに応じて楽しめる環境作り」

JBAにおける人間力向上

- インテグリティ委員会「一人の人間としての資質、人との関わりのなかで社会人としての資質、自発的に他者（社会）のために尽くす資質」
- 指導者養成委員会「指導者の人間力向上」

育成世代の子ども達の人間力向上を考える際に、どのような内容となるかの検討

- 学校における道徳教育
- 子ども達の規範意識
- スポーツマンシップについて **バスケットボール活動は人間力向上になり得る機会**

スポーツマンシップとは（スポーツマンシップバイブルより）

- 原始的な道徳であり、よき社会人になるための考え方
- スポーツマンとは「Good Fellow（いい人）」
- **尊重**（リスペクト=多様な他者の理解・フェアプレー精神=ズルをしない）
- **勇気**=自ら責任を持って決断し、行動・挑戦する 自己成長
- **覚悟**=自ら全力を尽くして、最後まで愉しむ 自己研鑽

2. スポーツマンシップがなぜ大切か？

バスケットボールを通じて、将来の人材育成が大切

- バスケットボール活動で経験することが社会に活かせる
- バスケットボールが上手である、競技力が高い選手を育てたいだけではない
- 健全な子ども達の成長に大人は手助けする責任がある

規範が守られにくい現代社会

- ルールを守らないことが容認される = あるべきではない姿
- 他者への思いやりの少ない行動、他者への意識の希薄さ = 社会病理との指摘在り

規範意識を意識的に学ぶことが現代社会では特に重要

- 規範意識は低下傾向
- 健全な選手の育成のためにより振る舞いを強化し、よくない振る舞いは正しく修正していくことが子ども達には必要
- 教育のないところに健全な発達はない、との指摘在り = 教育を意識する必要がある
- ルールを守る、お互いに気を配る（他者との関係性）
チームを創ることによる人間関係の構築

2. スポーツマンシップがなぜ大切か？

スポーツマンシップが大切な理由

- リスペクトを意識して行動することで、他者を大切にすることを学ぶ
- フェアプレー精神を意識して行動することで、公正に全力を尽くすことを学ぶ
- グッドルーザー：負けた時の対応を学ぶ
- グッドウイナー：勝ったときの対応を学ぶ
- 勝利以上の大切な価値を感じることができる プロセスから学ぶことができる

勝利以上の大切な価値を、目標（例えば試合）へのプロセス（過程）から学ぶ

- 試合まで「忍耐」「努力」「節制」「仲間とのチーム構築」「仲間へのリスペクト」
- 試合中「対戦相手へのリスペクト」「審判へのリスペクト」「フェアプレー精神を持ちつつ全力を尽くして勝利を目指す」「役割を考える」「感情コントロール」
- 試合後「グッドウイナー」「グッドルーザー」の在り方を学ぶ
- 規範を守りつつ、信頼関係を構築する過程を経験することができる

3. リスペクト（大切に思うこと）を子ども達に伝えよう

リスペクト（Respect）はなぜ大切か？

- リスペクトとは「大切に思う気持ちのこと」
- 子ども達が学ぶことで社会が明るくなる 社会的価値が上がる
- 立場の違う存在に対して、その価値や多様性を認め、大切にすること

リスペクトの内容（スポーツマンシップバイブルより）

①対戦相手

- 一生懸命戦う相手がいるのでよいゲームになる

②チームメイト

- 一生懸命やってくれる仲間がいるから良いプレーができる
- ゲームに勝利しようという同じ目標に向かって力を合わせる仲間
- ライバルだけど、控え選手・スタートと分かれるけれど・・・

③ルール

- ズルをして勝とうとすることはよくない
- ルールを尊重しながら勝敗を競い合うことが正しい姿

④審判

- 審判を尊重することはゲームを尊重すること
- 審判が公平に判定しようとしてくれている姿勢を尊重するべき

⑤ゲーム

- ゲームに勝とうと最大限努力する、取り組むことが大切で「勝ったか負けたか」より「どのように戦ったか=全力を尽くしたか」が大切な視点

4. フェアプレー精神を子ども達に伝えよう

フェアプレー精神とは？

- ゲームの中で守られるべき「ルールに則って公平な条件の下、正々堂々と戦う」という考え方や態度のこと（スポーツマンシップバイブルより）
- 「ルールを守りながら全力を尽くして勝利を目指す」というフェアプレー精神は、スポーツマンシップの中核をなす大切な要素

フェアプレー精神はなぜ大切か？

- ルールを守ろうとする精神が「フェアプレー精神」
- スポーツはよき社会人を作る手段として始まったが、結果が重視されるようになり「ズルをしてでも勝ちを求める」ようになってきている

フェアプレーの意義と価値を理解し、広く普及させよう

- リスペクトやフェアプレー精神の理解を深め、多くの大人から子ども達・保護者に伝えたい
- 自然に醸成されるものではないので、意図的に指導し、日々の練習時から繰り返し実践するように心がけることが大切
- 指導者のみならず保護者も理解することで、家庭での子ども達との接し方も考える

1. 子ども達にバスケットボール活動を通じて何を得て欲しいか

子どもの問い

「サッカーをやったことで一番よかったことは何ですか？」

イニエスタ（サッカー・バルセロナ→ヴィッセル神戸で活躍したサッカー選手）

「選手として成長できただけでなく、人として成長できたこと」

ライフスキル：社会人基礎力

前に
踏み出す力

主体性

働きかけ力

実行力

考え抜く
力

課題発見力

計画力

創造力

チームで
働く力Ⅰ

発信力

傾聴力

柔軟性

チームで
働く力Ⅱ

状況
把握力

規律性

ストレス
コントロール力

ライフスキルとバスケットボール

主体性	1) 自分で頑張れること
働きかけ力	2) 仲間と一緒に頑張れること
課題発見力	3) 何をやればいいのか自分で見つけれられること
計画力	4) いつまでに何をやればいいのか計画を立てること
創造力	5) 新しいやり方を見つけられること
発信力	6) 仲間に考えを伝えること
傾聴力	7) 仲間の話を聞くこと
柔軟性	8) 自分と違う意見でも聞くことができること
状況把握力	9) 周囲がどんな雰囲気になっているかを察すること
礼儀	10) 挨拶できること
規律性	11) 時間や約束を守れること
ストレスコントロール力	12) いやなことがあっても感情コントロールができること

6. 全力を尽くす大切さを子ども達に伝えよう

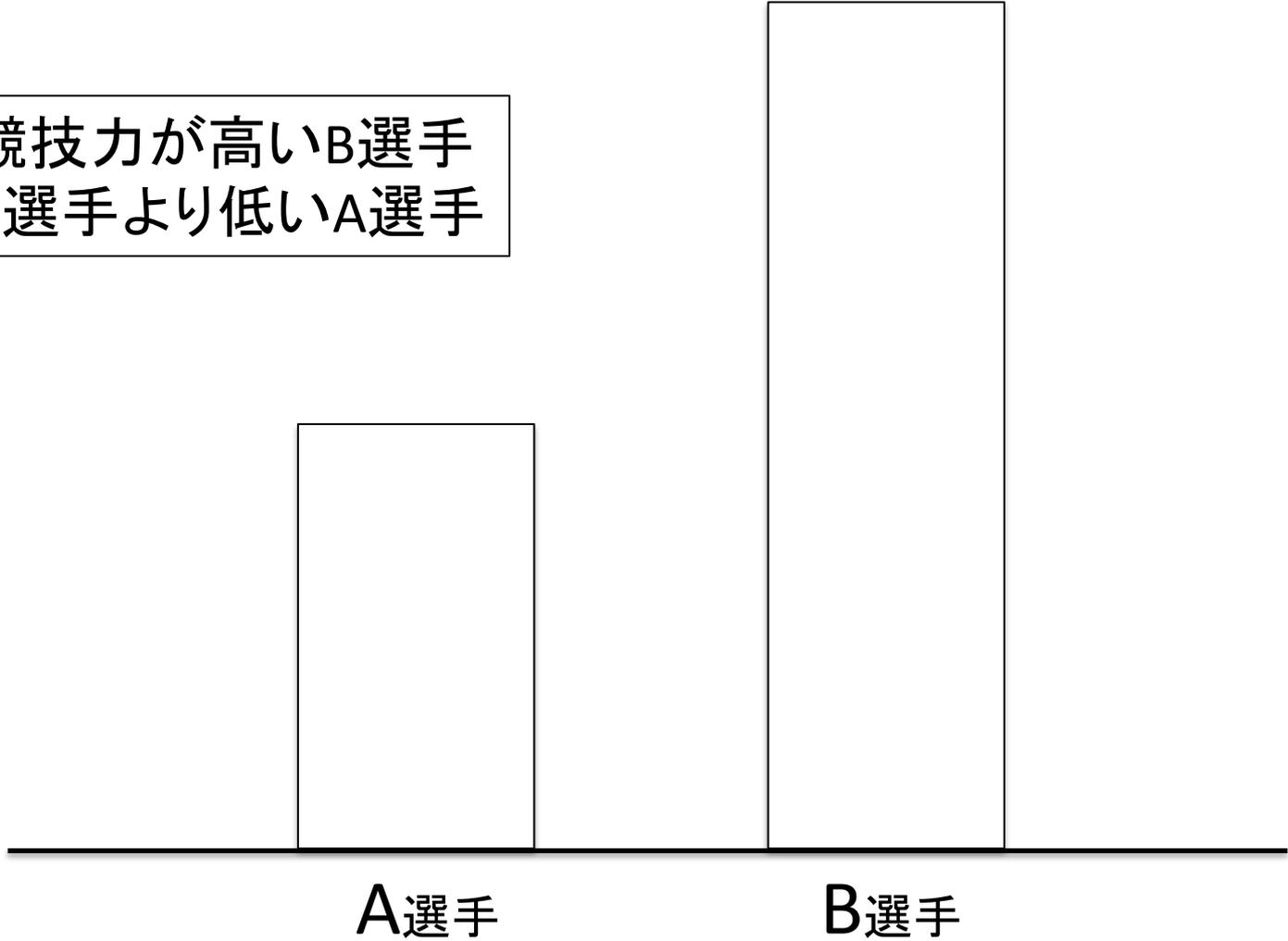
- ・ 「リスペクト（大切に思うこと）」は「尊敬」からも生まれる。
- ・ 「全力で取り組んでいる姿」は他者から見て「尊敬できること」。
- ・ 尊敬は他者を認めることになり、任せられるという信用・信頼にも繋がる。
- ・ 「チームを創る」とは「メンバー間の信頼を創る、個々の役割を知る」ことでもあり、「信頼を創る」ことは「個々が全力を尽くす」ことで創り上げていくことができる。

- ・ 「全力を尽くすこと」は「ベストを尽くす」とも同義である。

- ・ 子ども達が「自分のベストを尽くそうとする姿勢」を「日々のバスケットボール活動や日常生活を通じて学ぶこと」が、人間力向上にも繋がっていくと考えられている。
(スポーツマンシップバイブルより)

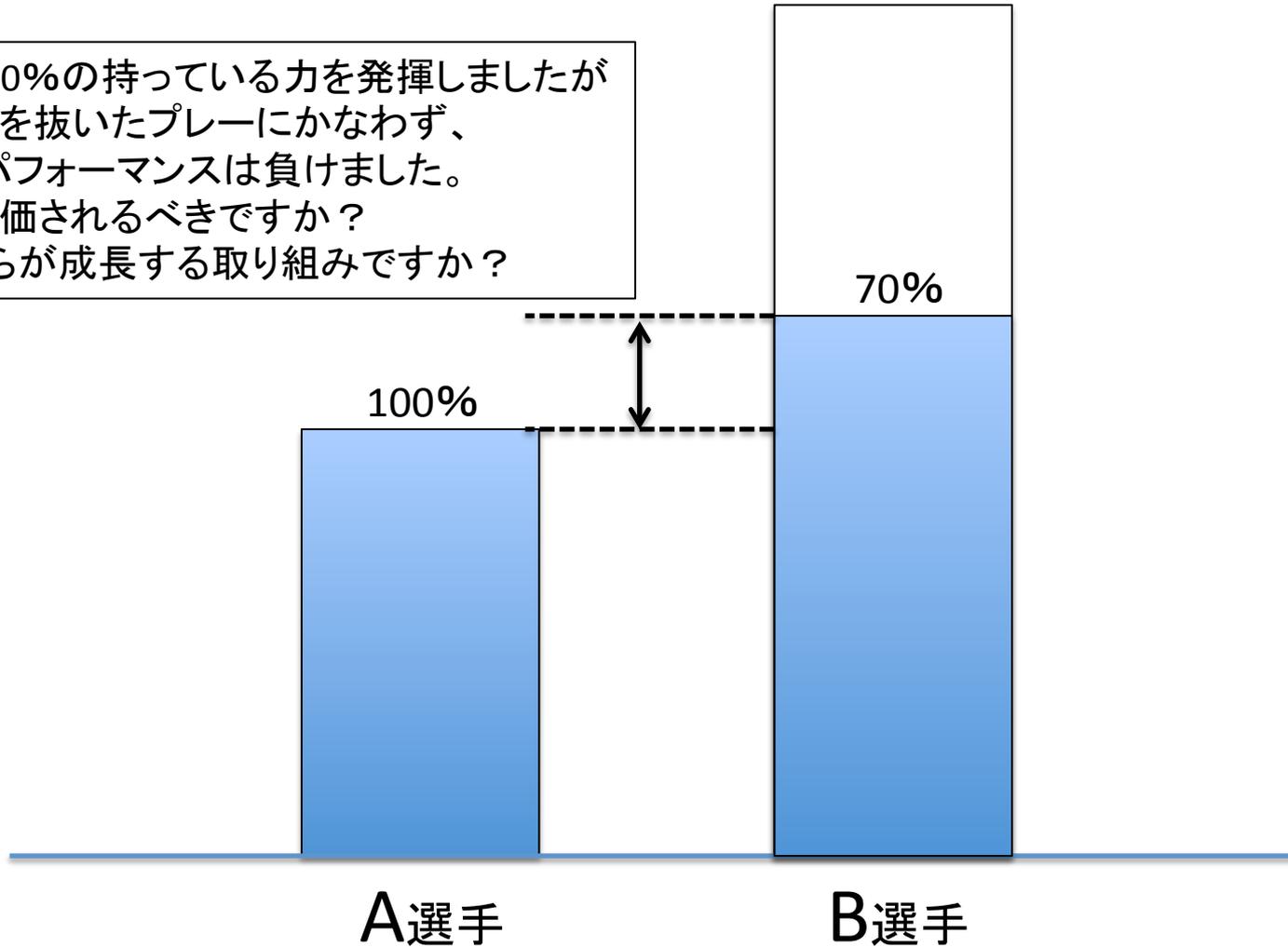
競技力

競技力が高いB選手
B選手より低いA選手



競技力

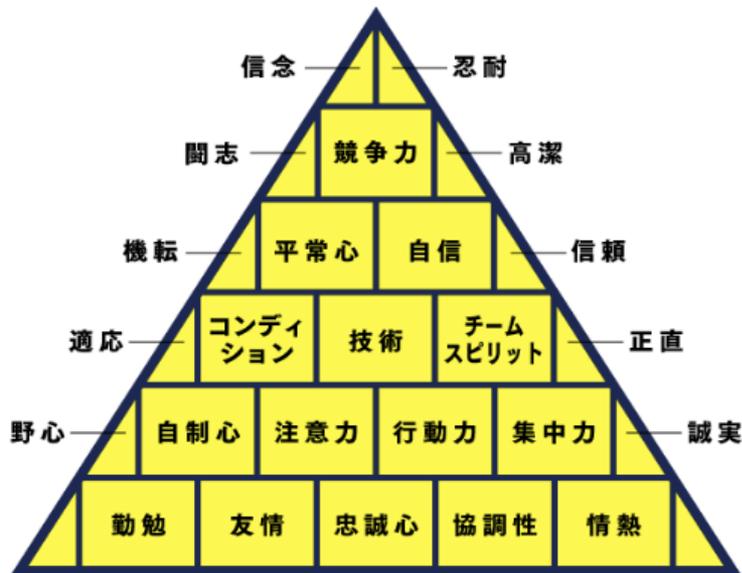
A選手は100%の持っている力を発揮しましたが
B選手の手を抜いたプレーにかなわず、
試合でのパフォーマンスは負けました。
どちらが評価されるべきですか？
また、どちらが成長する取り組みですか？



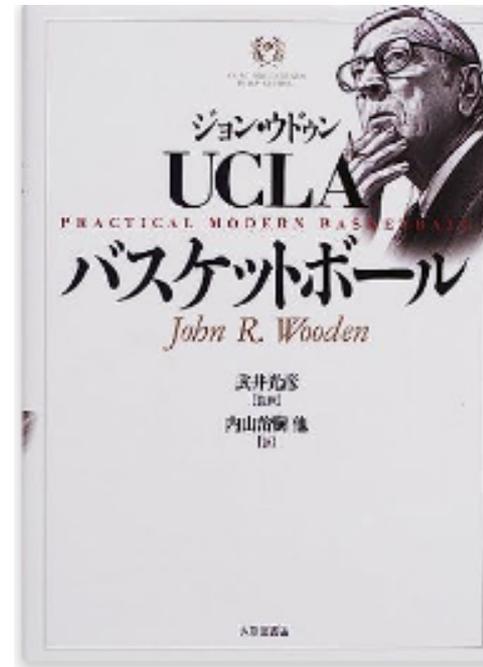
全力を尽くせば、成功である

ジョン・ウドゥン UCLAヘッドコーチ

成功とは、なり得る最高の自分になるために
ベストを尽くしたと自覚し、満足することによって
得られる心の平和のことだ



[ジョン・ウッデンの成功のピラミッド]



- ・ノミは体長の150倍もの跳躍力があるといわれています。
- ・そのノミを小さなビンに入れてフタをします。
- ・ノミはこれまで通り飛び跳ねるとフタにぶつかります。
- ・繰り返している内に、フタがなくなっても、そのノミはビンの高さ以上は飛び上がらなくなるそうです。

↓

過去の体験や自分の思い込みが自分の行動を止めてしまう（学習性無力感）

続きとして、

- ・他の普通に飛んでるノミの中に入れてやると、また元のように飛べるノミになる！

↓

誰と一緒に時間を過ごすかがとても大事

文句をいったり、言い訳したり、人のせいばかりしている人たちと一緒にいたら、自分も自然にそうなりがち。そういった人たちの中でパワーを発揮することは大変。

↓

お互いによい影響を与えあえれば、大きく伸び伸びと成長できる！

どんどん前向きに捉える人たちと一緒にいたら、成長のスピードは高まります。

7. 育成年代での過程を評価することの大切さ

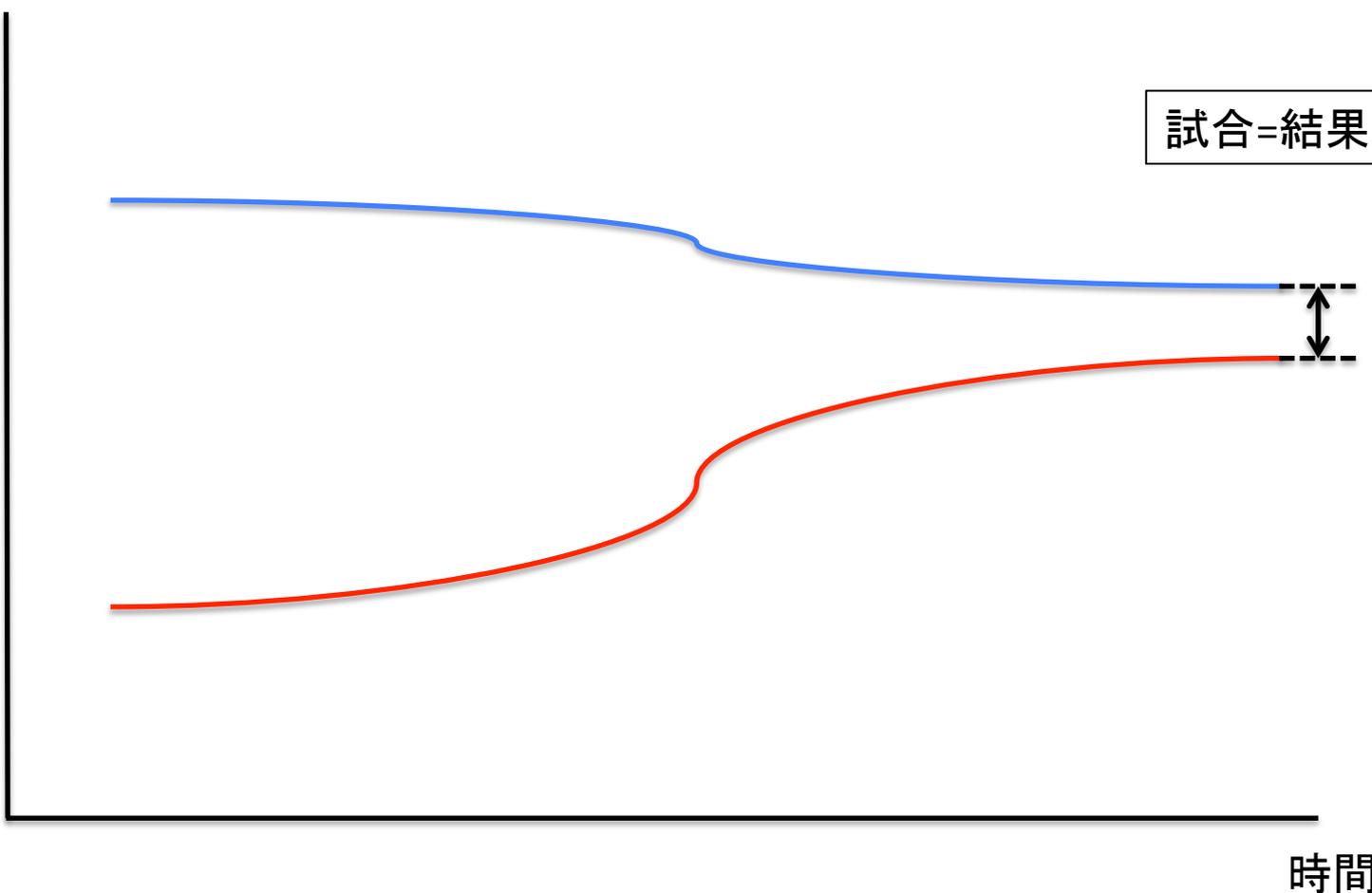
- ・子ども達は一人一人、持っている能力は違っている。
しかし「子ども達自身が、自己の持つ能力を伸ばそうと最大限努力する姿勢」が「育成世代で得るべき大切なもの」と考えたい。
- ・「スポーツには勝利よりも大切な価値があること」はこのことではないか。
- ・結果が評価されるか、過程が評価されるか、という見方があるが、育成世代では「過程（プロセス・取り組み方）を評価してあげることが、子ども達の個々の成長のためにはとても大切である。

どちらが評価されるべき？

青チームが試合で勝ちました。
赤チームは成長度が大きく、青チームは逆に力を落としました。
どちらが評価されますか？

競技力

試合=結果



プロセス（過程）を見てあげることが大切

結果で評価されるのは青。
年代が上がると結果で評価されることが多い。
しかし育成年代の評価はプロセスを評価するべきで
成長度が高い赤が評価されるのが育成の考え方。

競技力

試合=結果

成長度
低

成長度
高

プロセス(過程)

時間

8. バasketボールを通じて、何を子ども達には学んで欲しいか？

- ・Basketボールの技術戦術、体力も高めたいが、良き社会人に
- ・人としての成長
- ・「ライフスキル」

育成世代に大切なもの

2023/5/29

JBA技術委員会副委員長・ユース育成部会長

山本 明

JBA理念

「バスケットで日本を元気にする」

JBA育成方針

- I. 子どもたちの人間力向上に寄与できるバスケットボール育成
- II. 全ての選手がレベルやニーズに応じて楽しめる環境作り

両立し得ないような二つの側面がスポーツの持つ価値の本質

- スポーツは人格を養う教育的価値を持った場
- 真剣な遊び：気晴らしの要素 ぞくぞくする興奮 競い合う喜び

(東洋館出版社 スポーツマンシップバイブルより)

I. 子ども達の人間力向上に寄与できるバスケットボール育成

1. 育成世代の活動は、教育的であること
2. スポーツ（バスケ）から学べる勝利以上の大切な価値
3. なぜスポーツで人間力向上が行えるのか？
人間力向上とスポーツはどのように関わるか？
 - 1) 「人間力なくして競技力向上なし」
 - 2) スポーツは感情のコントロールが求められる場である
 - 3) 競技を通じて身につける人格的な総合力を「スポーツマンシップ」と呼ぶ

II. 全ての選手がレベルやニーズに応じて楽しめる環境作り

1. 全ての選手：競技志向とレクリエーション志向
2. 何を指導するべきか（競技志向/レクリエーション志向）
3. どのように指導するべきか（競技志向/レクリエーション志向）
4. 社会病理をバスケットボール活動として考える
 - 1) 目標
 - 2) 現状
 - 3) 原因
 - 4) 問題の根源
 - 5) 今の子ども達
 - 6) 感情が育つ上で必要な体験や機会をバスケットボールで
 - 7) バスケットボールが感情を育み、規範意識を学ぶ場に

1. 育成世代の活動は、教育的であること

「健全な青少年の育成」 は守らなければいけない

健全な選手育成に教育が必要

→ 教育がなければ人は人にならない

→ 好きな振る舞いをさせることは選手にとって可哀想なこと

2. スポーツ（バスケ）から学べる勝利以上の大切な価値

正解を一方向的に教え込み、言われた通りの行動ができる様に洗脳することが必要なのではない

経験を通して自ら考え、的確な判断力と行動力を養うことで初めてモラルを身につけることができるという事が重要

よき人格に基づいて的確に考える力を養うには、よき精神と優れた思考力が不可欠

だからこそ、指導する立場の人間は、プレーヤー達に単純な従順さを求めるのではなく、よく考えられる習慣を身につけられるように導くことが大事

3. なぜスポーツで人間力向上が行えるのか？ 人間力向上とスポーツはどのように関わるか？

1) 「人間力なくして競技力向上なし」(JOC)

試合までの過程において「忍耐」「努力」が求められるのがスポーツ
この過程で求められるのが人格であり、過程を通じて形成されるもの

指導者が強引にチームをまとめ、勝たせるケースもある

→ 選手は育っているか？ ロボット化していないか？ あるべき姿か？

**「選手が主体的に活動し、試合に勝とうとする過程を大切にして、得るものにより
人格は形成される」**
(東洋館出版社 スポーツマンシップバイブルより)

2) スポーツは感情のコントロールが求められる場である

感情を適切にコントロールできることは、社会的にも重要。

**「感情を発散させることはスポーツの良さでもあるがコントロールを学ぶことが
人格形成に繋がる」**
(JFA発行 マスター・オブ・エモーションより)

**3. なぜスポーツで人間力向上が行えるのか？
人間力向上とスポーツはどのように関わるか？**

3) 競技を通じて身につける人格的な総合力を「スポーツマンシップ」と呼ぶ

尊重：リスペクト フェアプレー精神

勇気：リスクを恐れず自ら責任を持って決断、行動、挑戦する勇気

覚悟：勝利を目指し、自ら全力を尽くして最後まで愉しむ覚悟

(東洋館出版社 スポーツマンシップバイブルより)

「人間力向上なくして競技力向上なし」

リスペクト、フェアプレー精神について

指導者/保護者/選手が

意識を向上させることを目指す

1. 全ての選手：競技志向とレクリエーション志向

バスケットボールを行う人の志向は、大きく二つに大別される

1) 競技志向

ルールを守りながら、成長（競技力、自己/チーム等様々）を目指したい

2) レクリエーション志向

バスケットをプレーする事が好き

ルールを守る人も、ルールに縛られたくない人もいる

競技力レベルに関係なく、自己成長へのニーズは様々

競技志向の競技者だけでなく、レクリエーション志向の競技者についても
視野に入れる必要がある

→ 運動部活動地域移行への対応策も検討する必要有り

1) 競技志向 ルールを守りながら、成長したい

<育成と強化の考え方> 勝利の捉え方を育成世代として考える

■ **育成とは「個の成長」を主とした目的とするもの**

- 年代を示すものではない 大学世代やプロでも育成選手といった使い方をする
- 勝利を目指すことは大切 バasketボールの本質は競争
- 選手達は勝利を大いに求めるべき、但し指導者は考えを持たなければならない

■ **強化とは「チームの勝利」を主とした目的とするもの**

- 勝利を第一にするべき活動がある 例：代表活動 プロチーム

育成世代で勝利を優先して選手に要求してきたことによる弊害例

→ 背景

年代毎のチャンピオンシップ = 勝利が唯一の価値と考えてしまう
育成世代のあるべき考え方が語られていなかった

→ 勝利に繋がる方法を選択してきた

若年層でのゾーンディフェンス活用 ポジションの固定化 役割の限定

指導者が持つべき育成の考え方は

勝利を得る最短の方法ではないかもしれないが

選手の成長に焦点を当て = 「選手が第一」「勝利は第二」

育成世代の施策のコンセプトは

オールラウンドにプレーさせよう 役割を決めすぎない ポジションを決めすぎない
マンツーマン推進を行い、基礎技術/プレーを学ぶ機会を作ろう
出場機会（プレータイム）を与えていこう

2) レクリエーション志向 バスケが好きでプレーしたい

<様々なレベルやニーズがある>

遊びとバスケ競技を分けているのは「ルール」

遊び＝ルールがない, ゆるい

競技＝ルールの中でプレー

競技レベルは様々

レクリエーション志向の中にも技術の高い選手は存在

ニーズ（モチベーション）は様々

上手になりたい人もいれば

ただバスケットボールをしたいだけの人もある

ルールに縛られたくない人もいる

<様々なニーズに対応する競技環境（活動環境）があるのが望ましい>

指導の在り方はいかにあるべきか？

→ 競技志向のコーチングは適さないことを指導者は知ること

→ レクリエーション志向の競技者へのコーチングも価値があることを関係者が理解

→ 指導内容は競技志向と同じなのか？

大会の在り方はいかにあるべきか？

→ チーム単位の大会参加資格だけでない大会

→ 緩和されたルール

→ レクリエーション志向の中でレベル別の設定が必要か？

2. 何を指導すべきか

<共通>

現代に求められる人財育成：リーダーシップ教育

→ 人財育成のためのリスペクト/フェアプレー精神の教育

<競技志向>

【拠り所】 ジャパンズウェイ ：日本代表選手に求める姿が提示されている

テクニカルレポート：国際大会から抽出された課題が提示されている

【内容】 個人の基礎技術

(パス/ドリブル/シュート/ボディコントロール, 1対1、ディフェンス)

局面構造別 (オフェンス/ディフェンス)

(トランジション、クリエイト、チャンス、ブレイク、フィニッシュ)

局面構造に沿った段階的戦術的負荷設定

<レクリエーション志向>

【拠り所】 上手になるための指導は受けたいので、技術構造は同様

【内容】 チームが勝つためより、個が成長するための指導内容に留意すべきか

3. どのように指導するべきか

<共通>

現代に求められる人財育成：リーダーシップ教育

→ 人財育成のためのリスペクト/フェアプレー精神の教育

安心安全：暴力暴言ハラスメント根絶

選手主体：選手のニーズを実現させていく視点

<競技志向> **育成マインド**

選手主体：自己状況判断力を向上させる トライできる環境作り 失敗を恐れない

課題の与え方：選手が答えを出せるように導く 指導行動と育成行動のバランス

勝利の捉え方：個の成長に焦点を当てながら、チームの勝利とのバランス

<レクリエーション志向>

4. 社会病理をバスケットボール活動として考える

1) 目標

暴言暴力ハラスメントをバスケットボール界の育成世代で根絶させる

2) 現状

スポーツのみならず保育/介護の現場でも暴言暴力ハラスメントが存在する

→ **日本の文化や現代社会の病理が影響**している

→ マルトリートメント（不適切な養育への対策）暴言/虐待対応

3) 原因

・相互監視システムが機能しなくなった

顔見知りの中では抑制されていたが対人関係や対社会関係能力が低下

青少年は基本的な対人関係や社会に関するルールを教えられないまま就学し学校では規則を遵守することだけを要求される

気のあった仲間だけで社会を作り自分たち以外の社会に関心を示さなくなってしまう

・価値観の多様化で、個人の価値判断が優先される社会となった

アメリカ：多様な価値観（多民族国家ゆえ）相互受容を促すための成熟した社会システムが構築されている。基準が法律などに明文化されている

中国韓国：儒教の教え/道徳律/規範意識が明確 個人の価値判断より、共同体や社会全般の価値判断が優先される

日本：価値判断のルールを決める社会的コンセンサスが形成されていない

子どもにとって社会規範を明確に認識することが困難

どのような規範を内在化するべきかという判断にも迷う

（啓林館：子どもの規範意識 より）

4. 社会病理をバスケットボール活動として考える

4) 問題の根源

→ 問題行動の当事者が自分の行為、行動に対して罪悪感を抱いていない？
問題行動の背景や原因にあるのでは？

- ・ 他者と関わろうとする感情が乏しい

この状態を放置して規範意識だけを説いても短絡的、対処療法的発想ではないか？

- ・ 社会というもの、他人というものに対して、きちんと認識や感覚を育てていない
- ・ 他者の存在を大切なもの（意味あるもの）と感じていない
- ・ 人は様々な他者（社会）の恩恵があって初めて生きていける、と感じていない
- ・ 他者の存在は自分の欲求を達成する際の障害でしかない、と感じている
- ・ そもそもそうしたことをあれこれいわれること自体がかつたるい、と感じている

5) 今の子ども達は

- ・ 他者からの眼差しや行為に触れても何も感じないことが多い
- ・ それが嬉しいことやありがたいことであることを周りにいた大人から言い聞かされている体験が欠けているから
 - 喜びや感謝の気持ちを自覚させる体験を積み重ねてきたが、そうした体験が乏しくなり、他者や社会というものに対する自覚が育っていない子供が増えた
- ・ 誰かの為に何かをすることを誇らしく思ったり、喜びに感じたりすることも少ない
 - 感謝されて気持ちが良かった、相手に喜んでもらえて嬉しかったという体験が少ない

（啓林館：子どもの規範意識 より）

4. 社会病理をバスケットボール活動として考える

6) 感情が育つのに必要な体験や機会に恵まれなかった

感情が未熟、未発達な段階にとどまっているにすぎない
だから、**感情が育つ上で必要な体験や機会を提供するだけで十分**である

そうすればその後の感情は彼ら自身が育んでいく

それを見守り、支えていくことが教育であり、教育的対応である

(啓林館：子どもの規範意識 より)

学校も取り組んでいるが、

感情を育てる場、社会規範をバスケットボール活動が教える場となれば良い

スポーツマンシップ教育 (リスペクト、フェアプレー精神)
インテグリティ教育 (暴言暴力ハラスメント根絶)
マルチリートメント啓発 (暴言/不適切対応を無くすため)